
爆走国家イタリア & アザース！！

ソダグァ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

爆走国家イタリア&アザース！！

【Nコード】

N86000

【作者名】

ゾダグア

【あらすじ】

『Axis Powers ヘタリア』の登場人(?)物である国家達がミニ四駆で対決する話です。各自『爆走兄弟レッツ&ゴー！WGP』でそれぞれの国家の代表が使ったマシンを使い、熱い勝負を繰り広げます。

さあ、みんな一緒に3.....2.....1.....レディ、ゴーッ！

（前書き）

この作品には私の政治・民族・文化的な主義・主張の類を発信するための物ではありません。あくまでレッズWGPMシンとアニメネタでヘタキャラを絡ませただけです。ですがお読みになると他の作品とは違った不快感を与える可能性があります。

また、私はここ10年以上ミニ四駆を触っておらず、現在の第3期ミニ四駆ブームにおける“普通”を分かっていないことと、話の都合で現役の方からすればおかしい点多く見受けられると思います。

これらの注意を読んでなお読んでも良いと思われた方、私の作品を楽しんでもらえると嬉しいです。

某国某所。そこでは何人（？）もの国家がプラスチック製の構造物の周りで叫んでいた。

「行け、ベルクカイザー！」

「シャイニングスコピオン、負けたら承知しないあるよ！」

構造物は灰色のプラスチック製部品が複数組み合わせられており、何本のレーンが並行して走っていた。いや、それはある物が走るためのものだった。

各レーン上には高速で走る物体の姿。それぞれ色形は違うものの、モーター音を高らかに響き渡らせている。それらは『ミニ四駆』と言った。

これから話されるのは、国家たちがなぜこんなことをしているのか、そしてその結果引き起こされた事件である。

さあ、みんな一緒に3……2……1……レディ、ゴーッ！

爆走国家イタリア&アザーズ！！

事の発端はとある会議の後、日本の家を南イタリア　ヴェネツィアーノとドイツが訪れた時にさかのぼる。

3人はコタツに入って会話をしていたのだが、日本はその間ずっと作業を行っていた。何やらプラスチック製のパーツをランナーから切り出し、組み合わせているのだ。パーツの収められた箱には他に

ゴム製のリングやモーター、ネジなども入っており、機械工作と思しい。

「あゝ、日本。一体何をやっているんだ？」

キチンと会話には参加できていたために、最初ドイツは日本を注意しようとは思っていなかった。だが、イタリアが興味馭々と言った瞳で日本の手元を見るので、話が滞ってしまうのだ。

ドイツの質問に日本は顔を上げて答えた。

「これですか？ ミニ四駆です」

「ミニ四駆？」

疑問府を浮かべるドイツに日本が口を開きかけた所で、イタリアが代わりに話した。

「あ、オレ知ってるよ。自動車のプラモデルで、電池で動かしてレースが出来るんだ」

大体の概要をイタリアが話す。それに日本は時折注釈を加えると、ドイツはミニ四駆の特性に関心をした。

「なるほど、エコカーの技術を応用した玩具か。中々興味深いな」
「大体そう思っていたできれば結構かと。しかし、出た順序は逆です」

ニッパーを使ってランナーからパーツを切り出しながら日本が訂正する。会話をしながらでもゲートを先にランナーから外してパーツを切りだすあたり、日本の細かさがかうか見える。

「この趣味を理解して下さる方が増えるのは嬉しいことです。よろしければビデオをさしあげましょう」

そう言って日本は少しの間席を外すと、何やらずっしりと重みのある紙袋を持って帰って来た。

「とりあえずWGP 世界大会編までを持って来ました。MAXはロリ巨乳のマリナたん萌えですが、まだDVDにダビングする作業が終わっていないので、また今度」

「すまん」

「ねえねえドイツう、見終ったらオレに貸してよ」

と、ここまでではただの趣味の交流になるはずだったのだが……。

「日本、今度レースをしよう」

こんなことを言いだしてしまうまでにドイツがミニ四駆にハマってしまったのだ。そのハマリ方はやや重症で、日本を訪れるたびに古本屋に寄ってミニ四駆についての書物を探すくらいだ。

イタリアは借りる前に自分の中で吹き替えられて放映されていたヴァージョンを見ていたのでイタリア代表ロンストラダの登場時の悪役ぶりに文句を付けてきたものの、ドイツ程ではないがはまってくれたようだった。

「それでは、明後日の会期終了後に私の馴染みの模型屋に行きましよう。あそこならミニ四駆のパーツの品そろえも良いですね」

会議の休憩時間に枢軸トリオが話していると、アメリカがやってきた。

「おい日本。聞いてくれよ　って、何の本だい？」

ちょうどドイツがミニ四駆改造ブック（今は亡き徳田ザウルス先生の漫画の載った貴重な書物である）を広げて、日本に見せている所だった。2人（？）は真剣に話していてアメリカに気付いていないので、話の高度さについて行けないイタリアが代わりに答える。

「ああ。ドイツがミニ四駆にハマっちゃってね、先輩の日本に色々聞いているんだ」

「ミニ四駆？　なんだいそれは。……ちょっと借りるよ」

「「あ、」」

アメリカはドイツの手から改造ブックを取り上げ、読み始める。

「へえ……ミニ四駆っていうのは車のおもちゃなんだな。

日本。俺にも一台くれよ」

「構いませんよ。ただし、キットを差し上げるので自分で組み立ててくださいね」

「H A H A H A！　元自動車生産TOPの実力を見せてやるぞ！」

このようにアメリカのように布教される場合もあれば

「ミニ四駆……『四驅兄弟』に出てくるおもちゃあるな。受けて立つある」

「ミニ四駆は韓国^{オレ}が起源なんだぜ！　『土屋レーシングファクトリー』？　『The Racing Factory』が正しいんだぜ！」

と、国内で放映されているので既に知っていることもあった。で

は、その次のステップは？

「じゃあ、レースしようよ」

当然こうなった。

だが、ここである問題が起こった。大会をどこで開くかで、国民たちが揉めたのだ。前途の通りドイツなどは酷い凝りようだったのだ、程度の差こそあれミニ四駆をたしなむ国家の国民はそれこそワールドカップやオリンピックのようになり上がった。ビジネスチャンスとばかりに禿鷹のようにミニ四駆の“ミ”の字さえ知らない金の亡者も群がった結果……

「第一回ミニ四駆世界大会は、シーくんでおおくりするですよ！」

国家ではないが、どこの国家にも属さないシーランド（本人は国家と主張）で開かれる事になった。ちなみに無用な混乱を国家たちが嫌ったので、国家とシーランド国民以外は立ち入りを厳禁している。

『実況はこの俺イギリスと』

『解説を俺様、プロイセンが担当するぜ。ケセセセ』

今回の出場国は『爆走兄弟レッツ&ゴー！WGP』およびそのメディアミックス戦略の一環で発売されたゲームで代表が登場した国家である。はぶられた中の一人であるイギリスが会場から近いからという理由で、プロイセンが一番ハマったドイツを身近にみていたせいでびみょーに詳しくなったため、それぞれ貧乏くじを引かされることになったのである。なお、他にも大会運営や撮影などの役割で何力国がスタッフとして参加している。

『それではエントリーナンバー1番、日本。マシンはビートマグナム』

『ミニ四駆発祥の国の意地を見せられるか。あと、ヴェストの話だと堅実な走りをする人が多いのに、マグナムって言うのが気になる所だ』

「やい日本、裏切りやがったな！ それに起源はオレなんだぜ！」

韓国の怨嗟の声を聞きながら日本がコース前に進み出る。

『次、エントリーナンバー2番、イタリア。マシンはディオスパードだ』

『アニメでの怒りを胸に改造したらしいぜ。でも、カルロは妨害なしで烈とミハエル抜いたんだから、そう悪くない扱いだと思うぜ』

イタリアが日本の隣に立つ。なにやら、自信満々だ。

『エントリーナンバー3番、ドイツ。マシンはベルクカイザー（R型）』

『本当はコンビンেশョン走行で力を発揮するマシンだが、ヴェストの調整でそんなの気にならないくらいになってる。日本と並んで優勝候補だと思ってるぜ』

ドイツは手の上のマシンを見つめながら、イタリアの隣に立つ。

『エントリーナンバー4、アメリカ。マシンはバックブレイダー』

『本来はリアルミニ四駆つつってディスプレイ用のキットなんだが、アニメと同じようにNASAの技術を使って走れるらしい。今回で1番のチートマシンな気がするぜ』

HAHAHAと高笑いしながらアメリカがドイツの隣に来る。

『エントリーナンバー5、韓国。マシンはハリケーソニック』

『日本に文句言ってたのが気になるな。』

おい、坊ちゃん。ちよつと聞いてみるよ。ハンガリー、迷わないようにについていてやれ』

日本、覚悟しろよ……。と、ぶつぶつとつぶやきながら恨みの視線を日本に送る韓国。彼が一步踏み出したところで、コース横の特設席からマイクを持ったオーストリアがカメラを担いだ不機嫌なハンガリーと共にやってきた。

「韓国、少しよろしいですか？」

「なんだぜ？」

「日本になにやら怒っているようですが、何かあったのですか？」

「良く聞いてくれたんだぜ！ アイツとどっちが烈と豪のマシンを使うか大会前に話しあったんだが、その時日本のヤツ『それではハリケーソニックはあなたに譲りましょう』って、言ったんだぜ。マグナム使ったのなら、今回はサイクロンマグナムが普通なんだぜ！ それをアイツは……」

それからしばらく韓国の怨嗟の声が続く。だが、その視線の先の日本は完全に無視するつものようだ。

『あゝ……、キッチンと話を聞けよって所じゃねえか？ イギリス、次行け次』

『えゝ、エントリーナンバー6は中国。マシンはシャイニングスコ
ーピオンだ』

イギリスはプロイセンに従い、次の中国を紹介する。
後はロシアのオメガ01、スペインのブロッケンG・ブラックス

ペシャル、フランスのシュヴァリエ・ド・ローズと紹介がすみ、最後にエジプトのピラミタスフィ尼克斯の紹介が終わって、出場選手10人がスタート地点についた。

『それではみんな、マシンをスタート位置に』

一斉に動力に電源が入れられる。モーターの音が要塞内に響き、各マシン準備完了だ。

『カウントを取るぞ。5、4、3……』

イギリスのカウントが開始される。

シグナル？ そんなものいちいち用意してられません。と、そこに乱入者が。

「ちょっと待つです！ シー君も参加するのですよ」

そう言ってシーランドがエジプトの隣のレーンについた。

イギリスが他のスタッフとシーランドを参加させて良いのか話始める。

「イギリス、別にいいじゃないか。どっちにしろ俺が勝つんだ」

「珍しくアメリカちゃんと意見が合うね。でも、勝つのは君じゃないよ」

「はよししないとバッテリーがあがってまうよ」

他の参加国はどうやら認める様だ。

イギリスも司会席に戻る。

『それじゃあ3カウントで行くぞ。』

3、2、1、Go Shoot!」

全11台のマシンがレーサーの手から飛び出す。障害のあるコースを周回するので、スターターを速やかに撤去するスタッフ（リトアニア）。

開始の合図がおかしい？ イギリスはブレーダーDJだから良いんだよ！

『さあ、全マシン一斉にスタートだ！ 先頭に行くのは……ドイツのベルクカイザー。その後を日本のビートマグナム、スペインのブロッケンG、と続く。残りのマシンは一進一退を繰り返しているぞ』

ところで、イギリスはプロイセンに訊ねる。

『ところでシーランドのマシン、あれはなんて名前なんだ？』

シーランドのマシンはスペインのブロッケンG・ブラックスペシヤル同様、フロントに積まれたモーターが露出しているのが特徴の青いマシンだ。

『ああ、あれはガンブラスターXTO。南米チームのマシンだが……劇場版で要塞の中を走り回っていたからってチョイスだろうな』

ガンブラスターXTO。爆走兄弟レッツ&ゴー!!の劇場版登場マシンである。GPチップの暴走によっていろいろと迷惑をかけ、ビクトリーズの活躍で無事持主のレオン少年の下に戻っている。といういわくつきのマシンだ。

『さあ、最初の難関、芝生エリアに先頭グループが入ったぞ。これを抜ければ直線だ』

ベルクカイザーを抜いたマグナムが緑の人工芝の敷かれたエリアに突入すると、一気に減速した。すぐにベルクカイザーが追いつくが、こちらでも減速してしまう。

「く……大径タイヤにするべきでしたか」

他のマシンも続々と突入して減速していく。中でも、シャイニングスコピオンの減速は酷かった。一気に最後尾へと落ちて行く。

「く……。しかし、まだ挽回できるある」

「行けえ！ デイオスパード。『アディオダンツァ』！」

イタリアの指示を受け、デイオスパードのコクピットが怪しく光った（と、スタッフをやっていたフィンランドは語る）。そして、シャーシから刃物が展開したではないか！

「あんな凶器積んでるなんて反則じゃねえのか？」

イギリスの突っ込みを聞いているのかいないのか、イタリアは自慢をし出す

「どうだい？ この前ジュリアーニさんに頼んで改造してもらったんだよ。でも、攻撃には使わないから安心してね」

「みんな変な改造してるみたいだし、他のマシンの妨害しなけりゃいいんじゃない？ イタリアもああ言ってることだしよ」

どうやらこの改造は認められたようだ。

さて、デイオスパードは刃でコース上の人工芝を刈るかと思いきや、スルーしていた。刃の設置位置が芝より高いのだ。その上、イ

タリアにとっては不幸なことに、重心が移動したことでバランスが崩れたマシンは不安定な動きを見せていた。

「ヴえ？」

疑問府を浮かべるイタリアに、ドイツが言う。

「イタリア。一人で踊っていて、楽しいか？」

そのまま後からディオスパードはブロッケンG、バックブレイダー、ガンブラスターというように他のマシンに抜かれて行ったのだった。

『ヴェスト……お前がミハエルやっても似合わねえよ』

「ほつといてくれ、兄さん」

××××××××××

さて、トップ集団は芝生エリアを抜け、直線エリアに入っていた。

「バックブレイダー、『パワーブースター』だ！」

と、ここでアメリカが腕時計からロッドアンテナを伸ばし、叫んだ。するとバックブレイダーが猛烈に加速したではないか。

「H A H A H A ! N A S A の技術をあんまり使わないで完成した、

『パワーブラスター』の効果を見るんだ!」

バックブレーダーはあっという間にガンブラスターとブロッケンGを追い抜き、先頭集団に追いついてきた。そして、トップに躍り出た。

「このままゴールまで突っ走ってやるぞ!」

嬉しそくに叫ぶアメリカは、そのまま直線コースを突っ走って行った。

××××××××××

「ガンブラスター、いくですよ!」

「なんの。お兄さんのシュヴァリエ・ド・ローズだって負けてらないよ!」

さて、アメリカが一躍トップに躍り出た影で、イタリアを除いた他のマシンたちも芝生エリアを抜けて直線エリアに入っていた。皆同じような速度で抜きつ抜かれつを繰り返していたのだが、その中であるマシンがぐんぐんと速度を上げていた。中国のシャイニングスコーピオンである。その高速走行はボディの青い部分が空気との摩擦熱で赤く変わるといふ、ゲームでのあり得ない設定を再現していた。

「我の高速セッティングと、中国四千年の秘儀を見るがよろし!」

原作ではビートマグナムとも拮抗したシャイニングスコピオンの高速走行。どうやら、トルクよりモーターの回転数を上げての高速走行に重点を置いたセッティングだったらしい。その加速は凄まじく、バックブレーダーのパワーブースターに匹敵するかも知れない。

「はぁぁぁぁぁ

……」

レーサーの中国は何やら額に汗をびっしりと流しながら足を止め、太極拳の様な動きをしている。マシンに置いていかれてるが、いいのだろうか？

『あゝ、中国。お前マシンはほつといて良いのか？』

「別にレーンの上を走っているのだから、一々追う必要はないある」

コースアウトした時に回収するためという名目であるが、一緒に走るのはぶっちゃけアニメのマネに過ぎないのである。一応レーサーはローラーブレード装備済みであるが、それだって疲れるのだ。

××××××××××

視点は再び先頭グループへ。

トップのバックブレーダーはローラーもないのにコーナーを余裕で曲がると、そのまま直線を爆走。第2の障害のループコースと、コースも難なく越え、第3の障害である急角度の坂に到達していた。

だが、ここでトラブルが起きる。

「しっかりするんだバックブレイダー！ 君はヒーローだろ？」

バックブレイダーが坂を登れないのだ。

これには理由がある。パワーブースターは凄まじい速度を出すことができるが、電力をものすごく消費するのだ。そのため、バックブレイダーが坂に到達する頃には電力を使い過ぎていた……という訳だ。

「く……『パワーブースター』だ！ がんばれ！」

アメリカが何度も指示を出す、腕時計型通信機に表示されたバックブレイダーのコンディションは既に『Power Booster ON』となっている。一応坂の途中までは行くのだが、何度ももずり落ちている。

「アメリカ、ようやく追いついたぞ！」

ついにベルクカイザーが追いついた。すぐ後ろにはマグナムも居る。レーン集約エリアに入っているため。マシンはバックブレイダーのすぐ横を通って行った。

2台とも苦しそうだが、坂を確実に登っている。

「お先に失礼します」

そして、2台は登り切った。

「お、アメリカが見えてきたあるな」

ブロッケンGも抜いたシャイニングスコピオンと、何故か自転車に乗り、香港と台湾と共に曲芸運転をしている中国も追いついた。高速型のシャイニングスコピオンも苦戦はするが、速度が落ちていないのでそのまま登り切った。

「じゃ、先に行くあるよ。」

台湾、香港。自転車、シェーシェー謝謝ある」

自転車を台湾と香港に任せ、中国はコース横を走る階段を登って行った。

その後もブロッケンGとガンブラスターはフロントモーターのおかげで楽々と坂を登って行き、シュヴァリエ・ド・ローズ、ハリケーンソニックと続々と追い抜いて行く。

「やったー！ アメリカに追いついたぞ！」

ついにはディオスパードまで追いついてきた。どうやらナイフは収納したようだ。

「く……最後尾のイタリアにまで……」

アメリカはその場にへたり込み、歯噛みする。彼にイタリアは話しかける。

「おちつけハマーD……じゃなくて、一体どうしたの？」

「笑ってくれよ。俺は調子に乗りすぎてパワーブースターを使い過ぎた。そして、電池不足で坂も登れないのさH A H A H A……」

「それなら、俺に任せてよ。ディオスパード、アディオダンツァ」
「WHAT S!？」

何を考えたのか、イタリアはデイオスパーダに指示し、ナイフを展開。そしてバックブレイダーの後部に突っ込んで行くではないか。原作同様の凶器攻撃。それが今起ころうとしていた。

『イタリア！？ 一体何を考えているんだ！』

だが、皆の予想した恐怖の瞬間は訪れなかった。

「へ？」

なんと、デイオスパーダは刃をバックブレイダーとコースとの間に差し入れ、そのまま坂を登り始めたではないか。

「こうして上まで運んであげるよ」

ニコニコとしているイタリアに、蒼白になっていたアメリカが訊ねる。

「どうして……こんなことを？」

「そりゃあ、楽しみたいから、かな？ ドベだっていいから、アメリカも完走しようよ」

坂の上に上り詰めるとデイオスパーダは刃を収納。そしてバックブレイダーを追い抜いて行った。

「それじゃあねー！」

ぼうつとしているアメリカ。だが、すぐに笑みを浮かべるとバックブレイダーに指示を出した。

「まだだよな。まだ走れるよな、バックブレイダー？」

バックブレイダーはモーター音で答えた。

×××××××××

『難所の坂を抜け、トップを争うのはシャイニングスコピオンとベルクカイザー、そしてマグナムの3台だ！ その後をFMマシン2台、ソニック、フランス野郎、ピラミタルスフィックスと続いているぞ！』

坂を越えると再びレーンが区切られ、第4の障害『連続ヘアピン』に各車至っていた。直線セッティングのシャイニングスコピオンは再び減速している。

「ここで俺の本領発揮だぜ！」

ここでソニックが持ち味を生かした華麗なコーナリングを繰り返した始めた。

ちなみに峠だと、直線で勝っていてもカーブで抜かれるという事は実力が下という事らしいけど、ミニ四駆だとそんなことはないよ。

「ソニック、『ハリケーンパワードリフト』だぜ！」

韓国の指示を受け、ハリケーンソニックは凄まじい速度でのコーナリングを行っている。その姿はまさに、原作での烈の走りを体現

していると言っても良いだろう。

「こっちもコーナーが得意なんや！」

ブロッケンGも凄まじいコーナー速度を見せ、追いすぎる。

「やりますね。では、私も奥の手を出しましょう。『マグナムダイナマイト』！」

日本が何やら必殺技らしき単語を叫ぶ。するとどうだろう、ビートマグナムはコースから飛び出したではないか。

『おーっと、日本がここでコースアウト。失格か！？』

『いや、あれは……』

コースアウトしたマグナムはそのまま跳び続け、カーブをいくつかスキップして着地した。

「どうです？ スーパービートシャーシを再現したビートマグナムの力は」

少し誇らしげな日本にドイツが申し訳なさそうに突っ込みを入れる。

「公式大会だとレギュレーション違反だな」

レーサーは少し落ち込んでいるが、マグナムは他を引き離して大幅にリード。そして次の障害に辿りついた。

『一躍トップに躍り出たマグナム。今、第5の障害『擬似オフロー

ドエリア』に到達だあ！

なあプロイセン。ただの地面にしか見えないんだが……」
『いや、それが曲者なんだ。このエリアの担当は……カナダとキューバか。粹な真似をしてくれるじゃねえか』

障害エリアに入った瞬間、マグナムの走りが荒くなった。ガタガタと車体は不安定に揺れている。

『レーザーミニ四駆で参加しているヤツが居れば、面白いことになったんだがなケセセセ』

追いついてきたシャイニングスコーピオンとハリケーソンソニックもかなり減速している。シャイニングスコーピオンは、かなり顕著だ。

「ビートシャーシのサスペンションは伊達じゃありませんよ」

ほくそ笑む日本。

速度は落ちながらも、マグナムは他のマシンと比べて安定性が高かった。

普通、スーパーTZシャーシは車高が低くなるため、オフロードではタイプ1などのRCを元にしたシャーシより走覇性が低いのだが、スーパービートシャーシを再現したと言っただけあってサスペンションが効いているのだろう。

「俺もバスターソニックにすればよかったぜ」

ビートシャーシの改良型シャーシを使っているバスターソニックならば、大型のサスペンションを使用しているためにビートマグナ

ムに拮抗した走りが期待できたらう。
だが、日本の独壇場とはいかない。

「ようやくトップがみえてきたですよ!」

「悪いけど、兄ちゃんもそう簡単に負けられないんや」

両車ともトルク重視の設定なのか、FMマシンが追いついて来たのだ。

『トップは依然としてマグナム。しかしガンブラスターとブロッケ
ンGも迫っているぞ。』

ん? あれは……!』

××××××××××

その頃、途中集団は連続ヘアピンで抜きつ抜かれつを繰り返して
いた。

「なんだかお兄さんハブられているけど、そう簡単に負ける気はな
いんだよ」

「僕だって、君に負ける気はないよ。まあ……アメリカくんには完
膚なきまでの勝利が決定してるから問題ないけど。」

「……………」

これが氷や砂漠コースなら話は違ってくるのだが、実に拮抗した
勝負を繰り広げている。

そこへ後ろから凄まじい速度で迫ってくる一台のマシンが。

「ようやく追いついてきたよ」

デイオスパーダである。なんだか、ストレートより早い。
何故こんなに加速したのか。その理由は……

「ナイフを投棄したらこんなに軽くなるんだもんな」

ナイフを外したからだった。なんと、ジュリアーニさんは、ナイフの強制排除機能を装備してくれていたのだ。

『装備の排除機能？ そんなの当たり前だろ。ドリルと自爆装置がつけられなかったのは残念だけどな。がっはっはっは』

フランスのシュヴァリエ・ド・ローズとロシアのオメガ01、そしてエジプトのピラミタスフィングスの横を華麗にパス。

「「あ、」

「……………」

そのままヘアピンを抜けたのであった。

××××××××××

先頭集団はオフロードを抜け、最後の難関へと到達しようとしていた。

「間もなくゴールですね……」

「ああ。だが、負けはしない」

マグナムとベルクカイザーがオフロードを最初に抜け、ゴールが視認できるところまでやってきた。2台ともトップスピードで一歩も引かない。

このまま2人がゴールか、誰もがそう思った。

「「!?!」」

日本とドイツは自らのマシンの姿が急に消えたことに驚く。2人はそのまま駆けて行くのだが、急に道がなくなって落ちた。ドイツはなんとか踏みとどまったのだが、日本は……

「アーイ キャーン フラアアイツ!」

と、言って落下したのだった。

「親方! 空から日本が落ちてきた!」

「何言ってるんですか……?」

まあ、下でバルト三国がトランポリンを広げてくれていたので大丈夫だったけどね。

だが、二人のマシンは空を舞っていた。

「飛べ! 飛ぶんだ、ベルクカイザー!」

ドイツさんがかなり無茶なことをおっしゃってますが、要塞内の換気扇から生み出される風でマグナムとベルクカイザーは空中で流される。

『マグナム、ここでコースアウトオオ！』

そしてマグナムはコース外へ落下。

『ベルクカイザーは、なんとコースを逆走し始めたぞ！』

下を走っていたコースに落ちたは良いが、風で向きが返られたせいで逆走し始めたのだった。

「ベルクカイザー。戻れ、急いで坂の下まで戻るんだ！」

ドイツはマシンを坂の真下のレーン集約エリアに急がせる。その間に後続車達は速度を落として飛ばされないように坂を下っていた。

『ディオスパードだ！ 芝生エリアで優勝争いから脱落したと思われていた、イタリアのディオスパードが、ここで追い付いてきたぞ！』

その際にディオスパードが先頭集団に切迫していた。

「あれ、みんなは？」

しかし、彼には日本とドイツの失敗と、後続マシン達の対策を見ることが出来なかった。

「ヴえええええっ！？」

その結果彼も、ドイツと日本と同様に空を舞ったのだった。

『うわあっ！?』

階段をゆつくりと下っていた他の国家達の上に落下するイタリア。ディオスパルダは、ディオスパルダは一体どうなったのか。国家達がディオスパルダに注目する。空を舞ったディオスパルダは、風に乗る、何とレーン上に着地した。

『ええええええっ！?』

そのままゴールイン。第一回国家対抗ミニ四駆レースはイタリアー（ヴェネチア ノ）が優勝の栄冠を手に入れたのでした（まる）

××××××××××

アメリカは、ゆつくりとバックブレーダーと並走していた。

マシンの電池残量が少なく、並歩と言ったほうが良いような速度だったが、たしかに並走していた。

「遅くてイライラするんだぞー！　いつそのことリタイアした方がいいんじゃないか？」

途中で何度かそう思っても、イタリアが助けてくれたことを思いだして耐えた。

もう速度を要する障害はないので、何とかバックブレイダーも走り続けられた。

『がんばれ、アメリカ』

実況をやっているイギリス、そしてスタッフ達も応援しました。

「Wow！ その速度で行くんだ、バックブレイダー！」

最後の坂道で位置エネルギーの助けを借りて速度を上げ、ゴールは目前。

『アメリカ、完走だあっ！』

そしてバックブレイダーはゴールラインにフロントタイヤが乗る位置で、停止した。

「「「おめでとう、アメリカ」」」

ゴールには他の国家たち^{レーサー}が居て、アメリカを出迎えた。だが、アメリカは彼らに礼を言つと、コースに入る。そして彼はマシンを手にとった。

車体を動かすまでではなかったようだが、タイヤがゆっくりと回っている。車体底にあるスイッチを切ると、タイヤの動きも止まった。

「ありがとう、バックブレイダー」

おわり

（後書き）

この度は私の小説のみならずあとがきにまで目を通していただき、ありがとうございます。

私はいつも、一体どこに需要があるか分からないような物を衝動的に書いてしまうのですが、この作品もそう言った一つです。しかし、興味を持っていたただけたのなら、さらに楽しんでいただけたのなら幸いです。

今後も、この方針で書き続けていくので、また機会がありましたら私の作品にあなたの時間を少しでもください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8600o/>

爆走国家イタリア&アザース！！

2010年11月12日03時07分発行